

〈論文〉

コロナの時代とフランクルの『夜と霧』

秋本 倫子

1. 初めに 『夜と霧』との出会い

『夜と霧』は、オーストリアのユダヤ人精神科医 Viktor E. Frankl (以下、「フランクル」という)が、ナチス・ドイツの強制収容所から奇跡的に生還し、そこでの体験を「一心理学者として」記した書で、世界的なベストセラー、ロングセラーである。Viktor Frankl Institut Vienna (2020)によれば、現時点で50ヶ国語に翻訳されている。日本では、霜山徳爾による翻訳で『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録』としてみすず書房より1956年に出版され、発売2ヶ月で12刷、という大変な勢いで売れ(河原 2017, 45)、「空前のベストセラーとなり、それから半世紀を超えた今でも、みすず書房の売れ行き No.1の本である」、そして、この1冊の本との出会いが、小さな出版社であったみすず書房を支えただけでなく、「100万近い日本の読者の心に届き、この国の「良心」を支えつづけている」(みすず書房トピックス アーカイブ)という。さらに、霜山訳、フランクル自身が改訂して出版した1977年版を訳した池田香代子訳『夜と霧 新版』(2002)共に、コロナの自粛期間の影響か、現在では電子書籍化され、一般の読者に一層届きやすくなっている。

学生時代、筆者は上智大学で霜山ゼミに属していたので、当然のように霜山訳の『夜と霧』を購入はしたものの、正直なところ、大して真面目に『夜と霧』を読んでいたとは思われない。末尾に強制収容所の残虐行為を伝えるショッキングな写真が収められていて、何度も開けて見るに堪えなかった。

“真面目に”じっくり再読したのは、多分、東日本大震災が起こってからである。あのときは、日本の半分が海に沈んだような感覚を持ち、この国は今になくなってしまおうのでは、と思った。身近なところに直接的に犠牲になった人はいなかったのだが、東京にいても、繰り返し余震を体験したし、

町中、電車の駅も計画停電で火が消えたように暗く、テレビから賑やかな番組が消えて、沈鬱ムードが漂っていた。前期授業いっぱいかけて、ゼミで、学生たちと池田訳『夜と霧 新版』を熟読した。学生たちも疲弊していたが、当時は筆者も、心身共にエネルギーが低下した状態にあつて、先の目標を見出せなくなっていた。『夜と霧』から、どのような状況にあつても生きる意味があり、私たちは人生からの問いに答えるべく要請されている、という、明確なメッセージを受け取ったのはこの時だった。この年に、筆者は、「V. E. フランクル『夜と霧』再訪——“運命”の生き方——」（秋本 2012）という小論を書いたが、それは、霜山徳爾の教え子の一人として本学に身を置いていることの意味を自身に問い、自身を鼓舞するためでもあつた。

このたびは、新型コロナウイルス感染症感染拡大、である。それは、ほとんど得体の知れないものとして突如やってきて、誰もが感染するかも知れない、また死にも至り得る可能性をほとんどすべての人、全世界に突き付けた。これを書いている 2020 年 11 月 24 日現在で、日本国内の累積感染者数は 13 万 3087 人、死者は 1995 人（日本経済新聞 2020）、全世界での感染者数は 5900 万人を超え、死者数も 140 万人に迫っている（Johns Hopkins University & Medicine Coronavirus Resource Center 2020）。一時減少したかに見えた感染者数が秋になって再び増加し始め、第 3 波、と言われ、緊迫感が増してきている。ワクチンの成功が報道される一方で、未だウイルス自体は終息の気配がない。現時点での、感染者数と死者数を見ると日本は深刻さの度合いが低いように見えるが、自殺が急増しており、2020 年 10 月の自殺者数は 2153 人と新型コロナウイルス感染による死者数を超えている（警察庁 HP 2020）。これには暗澹たる気分させられる。

この未曾有の状況に生きる私たちに、『夜と霧』は、フランクルは、何を教えるだろうか。

2. 霜山徳爾とフランクル

筆者は、先に、霜山徳爾という人を介して、その向こうに透けて見えるフランクルを知っていた。そこで、フランクルとその書を日本に紹介した霜山徳爾について少し述べておきたい。霜山は、本学、東洋英和女学院大学において創立時より教鞭を執り、本学における死生学および臨床心理学教育の創

始に大きく貢献があった人でもある。本人（霜山 2006, 6）および、かつて霜山が講師、理事をしていた東京保育専門学校の前校長であった畑島（畑島 2006, 13-15）によれば、霜山は、大正 8 年（1919）東京生まれ、戦時下に東京大学文学部心理学科で学ぶも、戦況の悪化により半年繰り上げ卒業となり、昭和 18 年（1943 年）学徒出陣で戦地に赴く。太平洋戦争中、海軍予備士官として過ごしたが、同期の 3 分の 1 以上が戦死したという。戦後、飢えに苦しむ窮乏生活を送りつつ、成蹊高等学校教授を経て、昭和 30 年より平成 2 年（1990 年）まで上智大学での心理学、特に臨床心理学教室の設立と発展に尽力した。霜山が目標とした教育水準は高く、実際、ゼミは厳しいことで有名だった。自らが 3 年次の演習について「これは、将来、臨床心理学を専攻しようとするプロのためのゼミであり、宿題や試験も多く、きわめてハードなゼミで、例年ドロップアウトする者も多いので、それ位なら始めから選択しないことをすすめる。（中略）教員も厳格な上に老年期痴呆の症候を有し、とかくの風評のある人物であるからなるべく避けた方がよいと思われる」（霜山先生に感謝する会 1990, 223）と紹介していたにもかかわらず、そして、ドロップアウト率が実際に高かったにもかかわらず、上智大学の心理学科で一番人気のゼミだった。実際には学生を見棄てることのない、温かい人柄であった。それへの返礼として、卒業生も、「霜山先生の面倒を一生見る会」を結成していた。しかし、霜山の授業やゼミで私たちは、心理療法の具体的な理論や技術を細かに学ぶことはほとんどなかった。霜山の弟子はおそらく皆異口同音に言うであろうが、授業は、漢詩や短歌、俳句も含む古今東西の文学や思想を散りばめた文学や哲学のようであり、しばしば挿入される難解な語句や英語、ドイツ語、フランス語の専門用語に引っかかりながらも、詩の朗読を聴くようであった。霜山は、臨床にはスキルよりも、人間観、哲学が重要とする立場だった。

授業の中で、また、霜山の著作を通して繰り返し語られていたのが、フランクルとの出会いである。戦後、ボン大学に留学していた際に、書店で偶然見つけた小さな「初版で粗末な装丁の本」（霜山 2005, 57）が『夜と霧』の原書『一心理学者の強制収容所体験』であった。フランクルとの出会い、交流は、よほど印象深かったものと見えて、様々な書の中に、微妙に筆致を変えて書かれている。

たとえば、霜山訳『夜と霧』訳者あとがき（フランクル 1961, 206-208）

には、以下のようにある。

私はウィーンに彼を訪ねたことを想い出す。彼は心から親切にこの東洋の一心理学者をもてなしてくれ、数日のウィーン滞在中あらゆる便宜を私のために計ってくれた。快活、率直な彼の人となりにはひかれ、私は彼と十年の知己の如く親密になった。しかし最も印象的だったのは、ウィーンの郊外の森の有名な旗亭アントン・カラスでワインの盃を傾けながら、彼からアウシュヴィッツの話を書いた時であった。謙遜で飾らない話の中で私を感動させたのはアウシュヴィッツの事実の話ではなくて……それは別のルポルタージュで私はよく知っていた……彼がこの地上の地獄ですら失わなかった良心であった。

池田訳『夜と霧 新版』に寄せた文章の中では、これに続いて、二人共が、グスタフ・マーラーの『大地の歌』を好むことがわかり、暗い夜道で一緒に声を張り上げて歌ったこと、最初の1章の「大地の哀愁に注ぐ酒の歌」の、各節についた「生も昏し、死も暗く」とうりフレインを「共に歌いながら帰ってきたのだが、明るく強い彼の言葉に陰翳のようにあるもの、彼の彼の世界観の深い底にある哀しさ、を示しているかのようであった」（霜山 2002, 159-164）ことが書かれている。

深い傷を負った留学中の霜山に、この世の地獄を経験し尚且つほとんどの身内をナチスに殺されながら快活で明るいフランクルは強い印象を与えた。そして、その明るさは「生来の楽天性」によるのかも知れなかったが、他方でその内部に深い哀しみや苦悩があるのがふと垣間見え、それは長調と短調が入れ替わるマーラーの調べとも相俟って、霜山の深い共感と呼んだのであろう。霜山の出版に関する執筆活動は、「翻訳から始まっているということであり、自著本の出版を間に、全ての翻訳本は全てフランクルによって占められていて、それはそのまま、徳爾とフランクルとの関係の濃密さを物語っている」（畑島 2006, 73）という。霜山の初期の著作の中には、フランクルと自身の思想が一体化しているようなところも見受けられる。そして、「人間学的」と言いつつも特定の流派に依らず自称「一匹狼」（霜山先生に感謝する会 1990, 335-336）だった霜山の最後の書となったのは、86歳で出版された『共に生き、共に苦しむ私の「夜と霧」』（霜山 2005）だった。霜山

にとつての「夜と霧」も戦争体験である。「共生共苦」は、霜山が生涯、臨床のモットーとした姿勢であるが、フランクルのそれと重なる。「苦悩することが意味に満ちているのと同じように、苦悩を共に遂行すること、共に苦悩することも意味に満ちています」（フランクル 2004, 219）とフランクルは書いている。

では、『夜と霧』には何が書かれていたのか。

3. 『夜と霧』とは何か

『夜と霧 新版』（ここでは、現代の読者によりわかりやすい池田訳を引用する）は、「『心理学者、強制収容所を体験する』。これは事実の報告ではない。体験記だ」（フランクル 2002, 1）で始まり、この書が、ホロコーストのルポルタージュではなく、あくまでもフランクルという個人の体験を書いたものであるという断り書きがある。しかし同時に、心理学者として、「すでに数十年前から知られている拘禁にかんする心理学や精神病理学に寄与するものである」（フランクル 2002, 9）ともある。そこで、主観的な記録と客観的な論考、という意見相容れない二つの観点から、強制収容所生活における心理状態の変化が、第1段階 収容、第2段階 収容所生活、第3段階 収容所から解放されて（解放と解放後）と、段階を追って描かれている。これらは、他の被収容者を観察した内容と、フランクル自身の体験がなймаぜになった形に見える。

第1段階（フランクル 2002, 11–32）では、「アウシュヴィッツ」に到着したときの、ショック、恐怖、そこから楽天主義が顔を出して「恩赦妄想」に似た形で希望にしがみついたこと、たった一人の親衛隊高級将校が人差し指をかすかに右か左に動かす方法で、生き残れるか、ガス室送りになるかの「選別」が行われたこと、全てを取り上げられて、「それまでの人生をすべてなかったことにした」こと、「やけくそのユーモア」や「好奇心」が生まれたこと、「人間にはなんでも可能だ」ということを驚きを持って認識したこと、そして、「ある世界をふまえた基本姿勢」から、「鉄条網に走らない」、つまり自殺はしない、と決意したこと、などが書かれている。

第2段階（フランクル 2002, 33–140）では、何を見ても感動が消滅した^{アパシ}状態になり、醜悪なものへの嫌悪感やサディスティックな行為に対する苦痛

の感情が消滅し、冷淡、無関心になっていったこと、それが精神にとって必要不可欠な自己保存メカニズムだったこと、飢えに苛まれ、食べ物をめぐる夢や日常の想念に表れたこと、しかし、あらゆる高次の関心が引っ込む中で、政治への関心と宗教への関心だけは例外であり、むしろ内面的・精神世界、たとえば妻についてのありありとした空想やたまに接する芸術や美しい自然、が重要性を増すようになっていったことが書かれている。第1段階でも「やけくそのユーモア」(フランク 2002, 24)があったが、ここでも生きるための「ユーモアへの意志」について書かれている。強制収容所では、被収容者は番号として扱われ、個々人の命は全く問題とされず、とことん貶められた。監視兵の気まぐれにより生死が翻弄されるような生活、それに空腹と睡眠不足が加わると、自分は単に運命のたわむれの対象であると考えようになり、自ら決断を下すということから退く。未来に希望を失い自己放棄に陥った被収容者は死に至る。そのような中で、「生きることの問い」についてのフランクの核となる考えが展開されている。

ここで必要なのは、生きる意味についての問いを180度転換することだ。わたしたちが生きていることからなにを期待するのではなく、むしろ生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ(フランク 2002, 131)。

さらに、以下が続く。

具体的な運命が人間を苦しめるなら、人はこの苦しみを責務と、たった一度だけ課される責務としなければならないだろう。人間は苦しみと向き合い、この苦しみに満ちた運命をともに全宇宙にたった一度、そしてふたつとないあり方で存在しているのだという意識にまで到達しなければならない。だれもその人から苦しみを取り除くことはできない。だれもその人の代わりになって苦しみをとことん苦しむことはできない。この運命を引き当てたその人自身がこの苦しみを引き受けることに、ふたつとないなにかをなしとげるたった一度の可能性はあるのだ(フランク 2002, 131)。

本来なら一刻も早く逃げたいはずの苦しみを、「たった一度だけ課される責務」（フランクル 2002, 131）と考え、むしろ何かを成し遂げる唯一のチャンスと考える。通常なら思いつくようなことではないが、これは、最もマイナスの状況を最もプラスに反転させる、究極の方法である。これは、「生き延びる見込みなど皆無のときにわたしたちを絶望から踏みとどまらせる、唯一の考えだった」（フランクル 2002, 131）という。

ある日の夕方、フランクルは、自己放棄、精神的な崩壊による次の犠牲者が出ることを未然に防げるよう、「少しばかり解説してもらいたいのだが」と、居住棟の班長から依頼され、「魂を教導」した。「生存率は 50%」と見積もる中で、「人間が生きることには、つねに、どんな状況でも、意味がある、この存在することの無限の意味が苦しむことと死ぬことを、苦と死をもふくむのだ」と告げ、犠牲にも意味があることを語った。その結果、「居住棟の梁に電球がひとつとまった。そしてわたしは、涙を浮かべてわたしのほうへ、礼を言おうとよろめき寄ってくるぼろぼろの仲間の姿を見たのだ」（フランクル 2002, 146）。フランクル自身も死を覚悟する中で、生のみならず、犠牲になること、死も意味があると、つまり全ての状況に意味があると語った。それは、少なくとも確実に一人の被収容者、そしておそらくは多くの被収容者を勇気づけたのである。

第 3 段階（フランクル 2002, 33-140）は、ついに強制収容所から解放され、ゲートが開く日が来たが、急激な変化により完全な精神的弛緩、強度の離人症症状、語ることの心理的強迫が起り、数日を経て感情、歓喜がほとばしった過程が書かれている。しかし、収容所の生活から日常生活に戻るのは決して平坦ではなく、「強制収容所から解放された被収容者はもう精神的ケアを必要としないと考えると誤り」で、むしろそこからが精神医の使命が始まるということが示唆されている。そして、そこには、フランクル自身、「誰かが待っている」希望にすがり、「母と妻との再会という未来のみが私を奮い立たせていた」（フランクル 2019, 63）。ところが、母親はアウシュヴィッツで、妻のティリーはベルゲン＝ベルゼン強制収容所で亡くなっていて、もはや会うことが叶わないという残酷な現実を迎えられ、これ以上はないほどの悲しみ、喪失、絶望と喜びの喪失、を経験する。この「自分は考えられるかぎりの苦悩のどん底にたつたと、何年ものあいだ信じていた人間が、いまや苦悩は底無しで、ここがもっとも深いということはないのだと、そして

ももっとも深く、ももっとも落ちていくことがありうるのだ、と見定めてしまうのだ……」（フランクル 2002, 155）という最悪の結果、予想を超えた試練にここで見舞われた。しかし、そこでまた、「……これを克服するのは容易なことではない。そうは言っても、精神医をめぐらせることはできない。その反対に、奮い立たせる。ここには使命感を呼び覚ますものがある」（フランクル 2002, 156）と、自らを鼓舞する。こうして、この書は、その後のフランクルの再起と活動を予感させるところまでで終わっている。

霜山訳の冒頭に添えられた「出版者」の解説では、フランクルは「自らユダヤ人としてアウシュヴィッツ収容所に囚われ、奇蹟的に生還しえた」とあるが、正確には、クリンバークによれば、フランクルは約2年7ヶ月の間、四つの強制収容所を経験している。現在のチェコにあるテレージエンシュタットに2年1ヶ月留め置かれた後、ポーランドのアウシュヴィッツ、正確には複数ある「悪名高いその支所」（フランクル 2002, 2）（アウシュヴィッツ＝ビルケナウ）のうちの一つにいたのは3日間のみであったという。その後、ダッハウ強制収容所の支所であるカウフェリング第3収容所とトゥルクハイム（カウフェリング第6）（ドイツ・バイエルン地方）に合わせて約半年間収容された後、ソ連軍により解放された（クリンバーク 2006, 1, 169–223）。『夜と霧』は、これら四つの収容所をわたり歩いた経験を、時系列に沿って記述したのではなく、実は、ある意図に添ってまとめたものである。クリンバークは、これを、「フランクルは、『夜と霧』でホロコーストの記録を試みたのではなく、他者を勇気づけるために、自分自身の経験から——彼の表現によれば——「なんらかの意味を搾り出す」ことを意図したのだ（クリンバーク 2006, 2, 360–361）と述べている。また、「四つの強制収容所における彼自身の経験の個人的な叙述というよりは、むしろ具体的な例により、ロゴセラピーの核となる思想をわかりやすく説明することをめざした」という分析（フランクル 2019, 27）もある。精神医学の道に進んだフランクルは、実は、強制収容所に送られる十数年以上前の1930年代、20歳代の頃に既に、ロゴセラピーの思想をほぼ体系化していた（フランクル 1998, 80）。ロゴセラピー（別称：実存分析）¹⁾は、「患者に彼の存在にかくれているロゴス（意味）を意識させる」（フランクル 2016, 23）分析的プロセスであり、①意志の自由、②意味への意志、③人生の意味の三つの概念

に基づく（フランクル 2015, 8）。フランクルが哲学を学んでいた高校生当時、ウィーンの高校生たちの間では、悲観的、無神論的なニヒリズムが蔓延し、自殺が多発していた。フランクルもその悲観主義に苦しめられたが、より肯定的で、宗教的ですらある視点に立つ実存主義哲学に触れてニヒリズムを克服し、「やはり人生には意味があるのだ」という希望を取り戻したという（クリングバーグ 2006, 1, 82-83）。強制収容所以前に、この青年期の実存の危機を経験し、人生の意味を重視する価値観の基を既に築き始めていたという。そして、1934年から1937年の間に、自殺の危険がある1200人もの鬱病患者と接する中で、自殺の危険がある患者と付き合う技術を着実に磨いていき、人生に意味があれば患者は自殺願望から解放されると学んだ（クリングバーグ 2006, 1, 122）。

つまり、『夜と霧』は、自らが期せずして自らによるロゴセラピーの実験台になった体験を通して、苦難のどん底にある人々を鼓舞し希望を与える目的でかなり意識的に書かれた本のようなのである。

4. 『夜と霧』後 責任と愛

しかし、『夜と霧』の結末にあるように、強制収容所から帰還したフランクルは、両親と弟、そして最初の妻ティリーを失くし、天涯孤独となった。「苦悩は底無し」（フランクル 2002, 155）とあったように、堪え続けた末に期待が裏切られた際の精神的苦悩は、強制収容所にいた時以上だったかも知れない。フランクルは、悲しみに打ちひしがれる中で、生き残った者として責務があること、そして、医師として心の復興を行う仕事があることを認識した。「生き残ったという事実を目の前にすると、生存者の責任、すなわち『サバイバーズ・レスポンシビリティ』を感じざるをえません」（フランクル 2019, 38）。「人生の喜びはもはや存在せず、あるのは義務だけです。僕は良心に支えられて生きているんです」（フランクル 2019, 57）。さすがに、そこには悲壯感を禁じ得ないが、フランクルを救ったのは、再婚相手となったエリー・シュヴィントとの出会いと愛であった。エリーは、フランクルの死後、彼女を訪問した朝日新聞記者の河原理子にこう述べている。「私たちが出会ったとき、彼は2冊の本を書き上げて、生きる意欲をなくしていた。私たちは食べるのも忘れて語り合い、彼は自分の苦悩を話してくれた。私は彼

の話に打たれ、この苦悩に満ちて悲しそうな人をどうやって救い出そうかと考えた。彼は一通り話した後で終止符を打つように『もうこれで話した。すべて終わりだ』と言ったの」（河原 2017, 236）。二人は深い愛で結ばれ、 فرانクルによれば、「彼女は、私の講演旅行のすべてに同行しただけでなく、光をもたらす暖かさそのものであった」（フランクル 1998, 151）。フランクルが 1950 年に出版した『苦悩する人間』には彼の直筆によるエリーへの献辞が残されていた——エリーへ あなたは、苦悩する人間を愛する人間に変えてくれました。ヴィクトール（クリングバーグ 2006, 2, 510）。フランクルとエリーは、2 人で 50 年以上の間に 5 大陸の全てで講演旅行し、1993 年時点で 1000 万 km 旅したと見積もられ、アメリカ合衆国のみで 92 回訪れている。数十万人がフランクルの講演を直接聴き、数百万人が講演記録を読み、テープを聴いた（クリングバーグ 2006, 2, 432–433）。確かにフランクルは大変エネルギッシュで雄弁な人ではあったが（その様子は、youtube 動画でも観ることが可能である。さらに筆者は、1990 年代に、学会で直接フランクルの講演を聴いたことがある）、フランクルが多くの著作を残せたことは、エリーの口述筆記による助けがあったからであり、世界中を回って講演できたこともエリーが同行したからであった。ふたりの会話はユーモアと遊び心にあふれていたという。『夜と霧』後のフランクルは、苦悩する人間から愛する人間になっただけでなく、創造する人間にもなった。夫妻を 7 年間取材したクリングバーグは、二人の間の深い愛情が「世界への献身」に発展したと分析している（クリングバーグ 2006, 2, 14）。しかし、フランクルが、人生の意味とそれに対する責任について頑固なまでに揺るがない信念を持ち続けたのには、他の要因もあったのではないだろうか。

5. 信仰について

実は、フランクルの人生観やロゴセラピーの基盤には、揺るがない信仰があった。彼はユダヤ教徒として、戒律、特に「父と母を敬うこと」を守る責任を大きく捉え、両親のために敢えて亡命しないことを選択したほどであった。両親の影響は大きく、「フランクルの心の錨は、つねに両親の信仰と希望の中に下ろされていたのである」（クリングバーグ 2006, 1, 87）。フランクルは非常に宗教的な人、敬虔なユダヤ教徒であり、祈りの人でもあった

(クリングバーグ 2006, 2, 486)。「フランクルは慈悲に富んだ神の摂理に対する揺るぎない信仰を持ち続け、あるいは与えられた」のであり、「それは、神も——私たちのために、私たちゆえに、私たちとともに、私たちに寄り添って——同じく苦しみ、終わりなき苦しみに耐えているという確信」だったのだとクリングバーグは分析している (クリングバーグ 2006, 2, 488)。彼は、強制収容所において、しばしば幸運を感じたが、そこに神の慈悲を感じ、希望をそこに置いていたのだと思われる。『夜と霧』におけるフランクルは、「神」という言葉を用いることには控えめであった。自らが信仰を持っている者だと告白しているのは、1箇所のみ (フランクル 2002, 139) で、ユダヤ教という言葉も出していない。フランクルは、心理療法としてのロゴセラピーについて、「『信仰があるとないつにかかわらずあらゆる患者に適用可能であるとともに、その個人的世界観にかかわらずあらゆる医師によって適用可能である』のでなければならない」(クリングバーグ 2006, 1, 35) と考えて、信仰についての記述を差し控えていたようである。先にも述べたように、『夜と霧』は、信仰を持たない人、ましてやユダヤ教を信じない人々にもメッセージが伝わるよう、熟慮して書かれたのだろう。また、フランクルは宗派にはこだわらない。「宗派は形式、道にすぎません。人にとって目標に到達することが大事であればあるほど、道のために争うことはなくなります。その道は単なる道、一つの目標へと向かういくつかの道の一つにすぎないと思うのです。それが寛容ということです」(フランクル 2004, 213)。すべての人類を一つの家族として抱き寄せる一人類主義の立場を取り、世界が信者と異教徒に分断されるのを、頑として拒否した (クリングバーグ 2006, 2, 486)。フランクルはユダヤ教徒、エリーはカトリック教徒だったが、そのことは全く問題にならなかった (クリングバーグ 2006, 2, 492)。彼は、世界中のあらゆる宗派の人々に語りかけ、異なる人種、民族、信条や考え方の人々をつないだのである。「この地球上で、苦難の連帯より偉大な連帯はないでしょう。私たちがなすべきことは、この苦難の連帯から行動の連帯を作りあげることです。私たちがしようとしているのは、苦難の仲間が戦う仲間になることです」(フランクル 2019, 228)。

“... There is survival value in the will to meaning, but as to mankind, there is hope for survival only if mankind is united by a common

will to a common meaning – in other words, by an awareness of a common task.”（意味への意志には、生き延びるための価値がある。しかし、人類にとっては、生き延びる希望があるのは、共通の意味への共通の意志によって、すなわち共通の課題を認識することによって人類が一つになる時のみである。（拙訳））（Frankl 2000, 141）

この、フランクルの言葉は、あたかも今この時代のために書かれたかのようである。パンデミックという地球規模の苦難は、共通の意味、共通の課題を認識することによって、人類が一つになるために他ならないのではないか。大事なことは、宗派や教条に固執することではなく、共通の目的のために連帯し、行動することだ。地球上には、これまでも常に人種、民族や思想・信条の違いに起因する対立があり、戦乱が絶えなかった。

感染者が8万5000人を超えた、しかしまだパンデミック、と宣言されていなかった2月にこの流行についての想いを綴ったイタリアの数学者、パオロ・ジョルダノは、流行を抑える対策により一定期間、感染を抑えることに成功しても、対策が緩んだ途端に、指数関数的な増大に戻り、「こうしてもっとも困難な第三の段階、忍耐の段階が始まる」ことを予測していた。彼は、パンデミックを、「この新しいかたちの連帯責任、もはや僕らの誰ひとりとして逃れることの許されない責任」（ジョルダノ 2020, 319）と書いている。なぜなら、この新型ウィルスの流行に関して、「どうしても犯人の名を挙げろというのならば」地球という生態系を侵略しているがゆえに「すべて僕たちのせい」（ジョルダノ 2020, 404）だからだ。「そのほうがよければ、COVID-19の流行はあくまでも特殊な事故だ、ただの不運な出来事か災難だと言うことも僕たちはできるし、何もかもあいつらのせいだと叫ぶこともできる。それは自由だ。でも、今度の流行に意義を与えるべく、努力してみることでできる」（ジョルダノ 2020, 619）。私たちは皆この責任から逃れられないと同時に、フランクル流に考えれば、これは、苦難を、何かを成し遂げるチャンスと捉え得る。

繰り返し考えるのは、「なぜ、今このようなパンデミックの時代に私は生きているのか」「パンデミックは、私に何を要請しているのか」ということである。

『夜と霧』から再度引用しよう。

生きることは日々、そして時々刻々、問いかけてくる。わたしたちはその問いに答えを迫られている。考えこんだり言辞を弄することによってではなく、ひとえに行動によって、適切な態度によって、正しい答えは出される。生きるとはつまり、生きることの問いに正しく答える義務、生きることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない。(中略)ここにいう生きることとはけっして漠然としたなにかではなく、つねに具体的ななにかであって、したがって生きることがわたしたちに向けてくる要請もとことん具体的である(フランクル 2002, 130)。

今、難しいのは、一つ一つの行動が、正しいかそうでないか、結果を見るまで、というよりむしろ結果がたやすく見えないために、判断できないことである。こちらを立てればあちらが立たない、ということも日常的である。外食や買い物を自粛すれば感染拡大には貢献するだろうが、経済活動が停滞して生活に困る人も出てくることを私たちは知っている。人に会って元気づけたいと思うが、会うことで相手を感染させるかも知れないとも考える。したがって、おそらく正解はなく、一人一人がその時々で判断して行動を選択しなければならない。それが、フランクルの言う、「この要請と存在することの意味は、人により、また瞬間ごとに変化する」ということで、問いは一人ひとりに発せられ、一人一人が自分だけの、具体的な答えを出す、ということであって、誰がこうしたから絶対に間違っている、と断罪するようなことではないのだと思う。万人に通用する正解はない。一人一人に具体的な運命、課題があり、一人一人が答えを出さなくてはならない。政府がこう言うからとか、周囲の人が見ているからとか、そういうことではない。また、他の人が出した答えを、非難することはできないのだ。人を非難するよりむしろ、自分は何をすべきかを考えることだろう。「人生は文字通り、人間が最後の息を引き取るまで意味を持ち続けるということが私の信念なのです」(フランクル 2015, 10)。

このパンデミックは大きな問いなのだ。状況がいかに悲観的に見えたとしても、日々直面する、二律背反の、答えのない問いに忍耐強く答え続けた後に、新しい世界が開けることを信じて、希望を持ちたいと思う。

筆者は、フランクルのように雄弁に、たとえば、自死を考える人に向かって、生きる意味を説くことはできないと思う。しかし、やはり決して雄弁でも声高でもなかった霜山が、「共に生き、共に苦しむ」形で、とことん病める人々に寄り添ったことを思い起こし、筆者も、自らの限られた領分で、できる限り「無関心」な態度を避け、ささやかでも隣人にところを寄せられたらと思う。怠りがちな心に「意識すること」「意識し続けること」を思い出させてくれるのがフランクルであった。

注

- 1) 英語圏では、ビンスワンガーの原理もフランクルの Existenzanalyse も共に existential analysis と訳されたため、混同を避けるため、英語で本を出版する場合には、できるだけ実存分析という用語は差し控えるようにしたのだという（フランクル 2015, 17）。

参考文献

- Frankl, V. E. 2000: *Man's Search for Ultimate Meaning*. New York: Perseus.
- Frankl, V. E. 2006 (1946): *Man's Search of Meaning*. Kindle edition, Boston: Beacon Press.
- Viktor Frankl Institut Vienna homepage 2020: https://www.viktorfrankl.org/books_by_vf.html、2020年9月14日閲覧。
- Johns Hopkins University & Medicine Coronavirus Resource Center 2020: <https://coronavirus.jhu.edu/map.html>、2020年11月24日閲覧。
- 秋本倫子 2012: 「V. E. フランクル『夜と霧』再訪―“運命”の生き方―」『東洋英和女学院大学人文・社会科学論集』第30号、59–82。
- 河原理子 2017: 『フランクル『夜と霧』への旅』朝日新聞出版。
- クリングバーグ, ハドン・ジュニア 2006: 『人生があなたを待っている〈夜と霧を越えて〉』1・2、赤坂桃子（訳）、みすず書房（原書: Klingberg, H. Jr., *When Life Calls Out to Us. The Love and Lifework of Viktor and Elly Frankl*. New York: The Doubleday, a division of Random House, Inc., 2001）。
- 霜山先生に感謝する会 1990: 『どら猫たちからありがとう』非売品。
- 霜山徳爾 2001: 『時のしるし』霜山徳爾著作集7、学樹書院。
- 霜山徳爾 2002: 『『夜と霧』と私―旧版訳者のことば』（ヴィクトール・E・フランクル 2002: 『夜と霧 新版』、池田香代子（訳）、みすず書房）。
- 霜山徳爾 2005: 『共に生き、共に苦しむ私の「夜と霧」』河出書房新社。
- ジョルダノ, P. 2020: 『コロナの時代の僕ら』飯田亮介（訳）、早川書房、Kindle版（原書: Giordano, P., *Nel Contagio*. Giuio Milan: Einaudi Editore, 2020）。
- 畑島喜久生 2006: 『霜山徳爾の世界 ある心理学者にかんする私的考察』学樹書院。
- フランクル, ヴィクトール・E. 1975 (1961): 『夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記

- 録』霜山徳爾（訳）、みすず書房（原書：Frankl, V. E., *Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager. Österreichische Dokument zur Zeitgeschichte I*. Wien: Verlag für Jugend und Volk, 1947）。
- フランクル, ヴィクトール・E. 1998：『フランクル回想録 20世紀を生きて』山田邦男（訳）、春秋社（原書：Frankl, V. E., *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen* (2., durchges. Auflage), Quintessenz MMV München: Medizin-Verlag, 1995)。
- フランクル, ヴィクトール・E. 2002：『夜と霧 新版』池田香代子（訳）、みすず書房（原書：Frankl, V. E., ... *trotdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, München: Kösel-Verlag, 1977）。
- フランクル, ヴィクトール・E. 2004：『苦悩する人間』山田邦男・松田美佳（訳）、春秋社（原書：Frankl, V. E., *Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee. Der Leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*. Zweite erweiterte Auflage, Bern: Verlag Hans Huber, 1984）。
- フランクル, ヴィクトール・E. 2015：『絶望から希望を導くために ログセラピーの思想と実践』広岡義之（訳）、青土社（原書：Frankl, V. E., *The Will to Meaning*. Plume, Penguin Publishing Group, 1988(1969)）。
- フランクル, ヴィクトール・E. 2016：『ロゴセラピーのエッセンス 18の基本概念』、赤坂桃子（訳）、本多奈美・草野智洋（解説）、新教出版社（原書：Frankl, V. E., *Grundkonzepte der Logotherapie*. Wien: Facultas Verlags und Buchhandels AG., 2015）。
- フランクル, ヴィクトール・E. 2019：『夜と霧の明け渡る日に 未発表書簡、書簡、講演』赤坂桃子（訳）、新教出版社（原書：Frankl, V. E., *Es Kommt der Tag, da bist du frei. Unveröffentlichte Briefe, Texte und Reden*. München: Kösel-Verlag, 2015）。
- 警察庁HP 2020：<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html>、2020年11月25日閲覧。
- みすず書房トピックス アーカイブ：<https://www.msz.co.jp/topics/archives/shimoyama.html>、2020年9月14日閲覧。
- 日本経済新聞 2020：「チャートで見る日本の感染状況 新型コロナウイルス」<https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-japan-chart/#d3>、2020年11月2日閲覧。

A Viktor E. Frankl Re-read During the Time of the Coronavirus Pandemic

by Michiko AKIMOTO

A worldwide best seller *Yoru to Kiri* (English title: *Man's Search for Meaning*, 1946/2006) was written by a Jewish psychiatrist, Viktor E. Frankl. The book has encouraged, empowered, and given hope to countless people in their sufferings world-wide. Tokuji Shimoyama, who first translated the book into Japanese, repeatedly referred to Frankl in his lectures and writings, and pursued, just like the psychiatrist, living with and suffering with those in distress throughout his whole life. The aim of this article is to search for some hints from Frankl's philosophy of life for living through this extraordinary situation when COVID-19 infection is rampant. In the Nazi concentration camps where the chance of survival was low, Frankl applied his logotherapy both to himself and to other prisoners. He suffered even more after he was released from the camp, as most of his beloved ones had died. What saved him from despair was the love of his second wife, Elly. In addition, he kept a strong faith in Judaism. According to Frankl, "life ultimately means taking the responsibility to find the right answer to its problems and to fulfill the tasks which it constantly sets for each individual" (1946/2006, p. 77). The pandemic may be a huge problem, but it can also be seen as a task that has been presented to the whole of mankind as well to each one of us. Each person must respond to it in each moment. In addition, Frankl said that mankind should be united by a common will to a common meaning or task. The author hopes that, by responding patiently to unanswered questions day by day, we will see a new and better world.